

# 原爆文学研究会報

第2号

原爆文学研究会 二〇〇二年 五月

例年になく桜が咲き急ぎ、そして散り急いだ春でした。

日常の忙しさにまぎれて、とうとうお花見の機会を逸してしまつた、と嘆く声も多くきかれました。それでなくとも桜の花びらが降りしきる様子を、私たちはなぜか古来からしず心なく眺めてしまうわけですが、この春、私たちの心に焦燥感をもたらしたものはどうやら桜だけではなかったようです。

今年2月27日、米国の原子力科学者会報は、「核の時計」の針を2分進めて、世界終末の7分前としました。その理由には、弾道弾迎撃ミサイル（ABM）制限条約から米国が脱退したこと、核物質の管理への不安、核兵器保有国間の対立、核兵器を狙うテロリストの存在などが挙げられているということです。

うかうかしている間に、私たちは今年の桜からアツサリ置き去りにされました。もしかすると、もつと取り返しのつかないものが今、頭の上をあっという間に通過していこうとしているのかもしれないかもしれません。私たちは、だから、日々の忙しさの中で立ち止まり、目を凝らし、よく考え、議論する「場所」を三ヶ月に一度、作り出しています。大きなレジャーシートを広げ、前の晩から寝ずの番をしても粘り強く「場所とり」したい宴が、ここにもあるのです。

## 第二回原爆文学研究会報告

二〇〇二年三月三〇日（土）長崎大学教  
キャンパス内において「第二回原爆文学研究会」を行いました。年度の節目、諸事繁忙の折にもかかわらず、長崎県内外から約二〇名が集いました。

服部氏の研究発表に続く意見交換においては、戦後間もなく「プロテスタントキリスト者こそが民主主義の本質を理解している」という発言が繰り返されたことと日本国憲法・教育基本法との関係、原爆を日本が生まれ変わるためのものだったとする「火の洗礼」意識への違和感などが話題となりました。

田崎氏の研究発表については、戦争の記憶は記憶そのものが戦争になるということ、異常事態の常態化と、聖典化された「原爆文学」が読み継がれていくコンテクストの空洞化などについて語り合いました。

運営協議会では、本会の機関誌「原爆文学研究」の構成や書式について検討しました（本会報四頁をご覧ください）。



## 研究発表1

# アメリカ占領下における「プロテスタント キリスト者」の「原爆意識」

服部 康喜（活水女子大学）

長崎市民の「原爆意識」を考えるにあたって、直接的な「原爆体験」と「アメリカ」という「他者体験」の二つのベクトルで考えることが必要ではないかと思う。敢えてこのような指標を提示したのは、長崎市民の「原爆意識」と言っても、共通した内実を持ち得ているのか、という事柄に対して懐疑的にならざるを得ないからである。その場合、長崎においては歴史的に「アメリカ」という「他者」のイメージが、「原爆意識」の形成に決定的に関わっていることを認めざるを得ない事情があったといつてよい。原爆投下という歴史的事実は、あれほどの惨禍をもたらしながら、必ずしも長崎市民の共通体験や共通意識を生み出しはしなかった。これが現実であり、何よりもその多様性を生み出したのは、「アメリカ」という「他者体験」の密度に大きく依存していたのではないだろうか。そして、この現象を観察するに当たって、ひとまず長崎のプロテスタントキリスト者のグループを「アメリカ」という「他者体験」の密度と質から、ひと括りの社会釣集団として措置してみよう。

太平洋戦争中、長崎のプロテスタント教会はそう広くない長崎市街地に六教会を数えていた。この中には、英国国教会系の「聖三一教会」が含まれるが、その成立ならびに維持に当たって支えてきたのは「米国聖公会外国伝道委員会」であり、長崎市内のプロテス

タント教会のすべては「アメリカ」のキリスト教諸教派の強力な支援のもとに存在していたことは否定できなかった。加えて、長崎市内にはミッシェンスクールとして創設された「活水学院」（女学校・高等女学校・専門学校）と「鎮西学院」（中学校）があり、戦争末期においてすら、それぞれ一〇〇〇名と九〇〇名を越える生徒を有していたことを考えるならば、たとえ戦中であつて日本の「国策」に協力・従順であつても、それ以前の「アメリカ」との濃い関係は歴史として、個々のプロテスタントキリスト者の意識の中で生き続けたのだつたし、たとえキリスト者でなくても「アメリカ」という「他者」の影は、長崎市の狭隘な土地と居住人口から見れば相対的に広範囲にわたって浸透していたと言つていい。

このような歴史的前提を踏まえ、戦中、戦後と長崎市で発行されていた「長崎日々新聞」および「長崎新聞」の記事を辿ってみると、「原爆投下」の当事者である「アメリカ」は、戦後、長崎市内のプロテスタント教会およびミッシェンスクールの復興に多大な貢献をしていたことが明らかとなる。さらに、「アメリカ」的デモクラシーの定着のためには、キリスト教の保護・育成を積極的に推し進めたGHQの方針とも重なって、日本のプロテスタントキリスト者にとつて、文字どおり「春」が訪れることとなる。問題は「彼ら」にとつての「アメリカ」はどう写つていたか、であり、長崎という地域に限定して、その「影」の内実を考えたい。

## 禁じられた遊び―核武装の夢想『沈黙の艦隊』―

田崎 弘章(佐世保高専)

「戦争兵器」として「原爆」を使用されたのは、現時点では第二次世界大戦時の日本だけである。この事実を以て世界で唯一の「被爆者」という「視点」が誕生し、それに基づく「語り」が形成されていくことになる。しかし、その「視点」と「語り」は、被爆の現実があまりに特殊で悲惨なものであったため、「証言」から「文学」へと語り直される中でも、そのまま受け継がれ、本研究会第一回に川口隆行氏が指摘されたとおり、「正典」とも呼ばれるべき「領域」を形作った。しかし、「核」を主要なモチーフとする作品は、原爆投下直後から、『SS』映画、『SS』小説、劇画等、所謂「エンターテインメント」の分野でも、数多く生産されており、現在では、質・量ともに既に無視できないレベルに達している。これらの作品群は、被爆者の視点に依拠する「正典」には不可能であった表現を獲得することに成功しており、今後「原爆文学」の一つの在り方として評価するに値する内容を含んでいるものと思われる。

本発表では、かわぐちかいじの劇画『沈黙の艦隊』を取り上げ、現代における「原爆文学」の可能性としての評価を試みた。「被爆者」という「視点」「語り」を離れば、「核」を扱う表現は、「国家」「戦争」「近代科学技術」「近未来」といった要素が前面に露呈し、『SS』もの「あるいは「戦争もの」といった娯楽作品の範疇に括られる性質を帯びやすい。しかし、『沈黙の艦隊』は、漫画雑誌に連載された

「劇画」であり、最初からエンターテインメントを狙った表現であったにもかかわらず、「核」を巡る表現ゆえに、逆に単なる「娯楽」には収まりきれない「ノベル」を生じさせているように思う。この「ノベル」は、「戦争放棄」を謳った「日本国憲法」の下、「非核三原則」を国是とするはずの「日本人」が、核兵器を搭載している（かもしれない）原子力潜水艦国家と同盟することによって自国防衛を試みるという設定によるところが大きい。「核アレルギー」という、多分に不思議な言葉が象徴しているように、日本において「核武装」を唱えることは原則として禁忌であり、そのことは原爆文学の「正典」として読み継がれているものを見ても明らかである。『沈黙の艦隊』は、この禁忌を犯すところから出発し、国家を超えた原潜艦隊による核抑止力で、地球上から核兵器を廃絶するという構想を描いてみせる。物語は、正統な「劇画」らしく「正義」へと収斂していく。その正義とは、世界政府の樹立であり、核兵器の無い平和な世界の実現である。「日本人」による「核武装」という刺激的な設定から始まる『沈黙の艦隊』であるが、結果的には日本の国是である「非核三原則」を「正義」として世界に敷衍することを高らかに謳い上げていくように読ませてしまう。

また、『沈黙の艦隊』は、「核兵器」を使用する立場に身を置いてみるという思考実験を、最新兵器の具体的ディテールとともに読者に提供してみた。このことは戦後日本において長く忘れられてきた「当事者としての戦争」の意識を読者に対して啓蒙することになった。これは図らずも冷戦終結後に問い直され始めた「日本」と同調していくことになる。

# 彙報

## 第二回 原爆文学研究会

○日時 二〇〇二年三月三〇日(土) 十四時より

○会場 長崎大学文教キャンパス教育学部棟会議室

○内容 研究発表

アメリカ占領下における「プロテスタントキリスト者」の〈原爆意識〉  
服部 康喜

禁じられた遊び―核武装の夢想『沈黙の艦隊』―

田崎 弘章

運営協議会

○懇親会 (十八時〜)

## 機関誌「原爆文学研究」原稿募集

本研究会が年に一回発行する「原爆文学研究」創刊号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載することが第二回研究会の運営協議会で合意されました。奮ってご投稿下さい。

記

○書式 縦書き、三〇字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇二年六月中旬、データファイル (Word か 一太郎) を添付しての投稿の場合は六月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁 (機関誌の書式) につき、

一、〇〇〇円程度を発行経費として出資する。

○投稿宛先 原爆文学研究会事務局 (住所・連絡先は会報末)。

## 編集後記

会報第二号には、第二回研究会での発表要旨を寄稿していただいた服部氏、田崎氏の他に、リード文も内田友子氏に寄せていただきました。お三方ともこちらがお願いしておりました期日より早く文章を送って下さったので会報の編集作業を円滑に進めることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

リード文で触れられています「核の時計」(終末時計とも)が、米国の各専門誌「The Bulletin of the Atomic Scientists」の表紙に初めて登場したのは1947年(7分前)、以後3(分前) / 49(年)、2 / 53、7 / 60、12 / 63、7 / 68、10 / 69、12 / 72、9 / 74、7 / 80、4 / 81、3 / 84、6 / 88、10 / 90、17 / 91、14 / 96、9 / 98と動いてきてるようです。ちなみに49年の3分前はソ連の原爆実験、53年の2分前は米国の水爆開発、84年の3分前は米ソの対立激化がその理由となっています。91年には最も針が後退していましたが。(N)

※次回(第三回)の研究会は二〇〇二年六月二十九日(土)に九州大学六本松キャンパスにて開催します。詳細は後日連絡いたします。

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811-6520 福岡市中央区六本松4-2-1

九州大学大学院比較社会文化研究院 花田俊典研究室内

tel/fax 092-726-4597 e-mail hanada@rc.kyushu-u.ac.jp